けものの王さま　広島県

むかし、ある山の奥に、おばあさんがひとりで住んでいました。

ある雨の降るさびしい晩に、おばあさんは、糸車をブーンブーン回して、糸をつむいでいました。すると、山からとらがやってきて、おばあさんが寝たら食べてやろうと、縁の下にもぐりこみました。ちょうどそのとき、どろぼうが、おばあさんが寝たらお金を盗んでやろうと思って、屋根によじのぼりました。

おばあさんは、糸をつむぎながら、ひとりごとをいいました。

「どろぼうや、とら、おおかみは恐くはないが、もるん殿こそおそろしや」

もるん殿というのは、天井から雨がもることで、おばあさんは、いつも雨がふると、もるん殿になやまされていたのです。

これを聞いたとらは、

「こりゃ、おそろしいことをいう。この日本にわしより強い者はおらんと思うていたのに、まだ強い者がおるのか。こりゃあ、かなわん」といって、逃げ出そうと、縁の下からはい出てきました。

ちょうどそのとき、屋根の上のどろぼうも、

「とらやおおかみよりもっと恐い、もるん殿というやつがいるのか。うっかり家の中に入っていったら、食い殺されるかもしれん」といって、屋根の上から飛びおりました。

ところが、どろぼうが飛びおりた所は、とらの背中の上でした。とらは、もるん殿というやつが自分の背中にまたがったんだと思って、

「もるんが乗った、もるんが乗った」とさけんで走り出しました。どろぼうは、大きなとらの背中の上で、

「逃げようにも、えらい速く走っているし、うっかりすると、食い殺されるかもしれん」と、必死でしがみつきました。

とらは、もるん殿をふり落とそうと、あちこちかけ回りましたが、どうしても離れません。ふり回せばふり回すほど、しがみつくので、

「もるんが乗った、もるんが乗った」とさけびながら、山や谷をかけ回りました。そのうち、小さなお堂の前を通りかかりました。どろぼうは、

「ここで飛びおりなければ、命はないぞ」と思って、命がけで飛びおりました。そして、飛びおりるが

早いか、お堂の中にかけこんで、戸をぴっしゃり閉めました。
とらは、ほっとして、大きな声でさけびました。
「おーい、日本のけものはみんな集まれぇ」
すると、あっちからもこっちからも、くまやいのししや、きつね、犬、ねこ、ねずみなど、日本じゅうのけものが集まってきました。とらはいいました。
「おれは、唐からやってきて、日本じゅうで一番強かったから、けものの王さまになった。ところが、いま、日本には、もるん殿という強い者がいると分かった。だから、おれは、唐に帰る」
みんなは、
「それはいけない。もるん殿の正体を見届けるまでは、王さまに帰ってもらっちゃ困る」といいました。
そして、一匹のさるが、
「王さま、王さま、そのもるん殿は、いったいどこにいるんですか」とききました。とらは、
「このお堂の中に入っとる」といいました。
「それじゃ、おれが、もるん殿の正体を見てみましょう」
さるはそういうと、自分のしっぽをお堂のとびらの節穴の中につっこんで、ぐるぐる回しました。中にいたどろぼうは、おそろしくて、しっぽをつかんで力いっぱい引っ張りました。さるは、
「もるんが引っ張る、もるんが引っ張る」とさけんで、あばれました。さるの顔は真っ赤になって、おしりもすり切れて赤くなって、長いしっぽはちょん切れてしまいました。
このときから、さるの顔は赤くて、おしりも赤くて、しっぽは短いのだそうです。
さて、とらが唐へ帰ってしまったので、日本には、けものの王さまがいなくなりました。けものたちは、自分こそ王さまになるんだといって、さわぎだしました。すると、きつねがいいました。
「明日の朝、一番に日の出をおがんだ者が、王さまになるとしよう」
みんなは、それはいい考えだと賛成しました。
あくる日、まだ夜の明けないうちから、けものたちは、
「我こそは一番に日の出をおがんで王さまになろう」と、東を向いて待っていました。ところが、きつねだけは、西を向いて手を合わせていました。みんなは、
「おい、ばかだなあ。西から日が出るものか」と、はやしたてました。
だんだん夜が明けかかり、今にも日が昇ろうとしたとき、西を向いていたきつねが、
「さあ、おがもう」とさけびました。みんなは、びっくりしてふり返りました。そのまに、きつねは東

をふり返って日の出をおがみました。

こうして、きつねが日本のけものの王さまになったというはなし。

おしまい

村上郁再話

資料『安芸国昔話集』磯貝勇／岡書院